

合戦此むこ私務もそ公掛のゆこは在に  
津の国此於西中一もは龍走て仕るる子連は  
登幸得はこも上河先手ハ高山右近中川  
源玄播磨もは臨川意よりは中へ可な縁に  
と能直る此子飛節も来作と第一事

一 大坂もは三七名唯陀丹羽も所在事ハ後織田  
七玄播磨此三人も所小大名元四六人此在に  
惟澄五郎左衛門及所より事り人とも近日姫  
地へ所帰城此より一承は早く所馬と急急候

へよ拙者式も此帛合戦一ツ心指人ともも如  
此存七玄播磨との名は向守聲の事より旨定と  
内訌ハ一味同心可有候と推量仕中へ疑とも  
不中いゆへ大坂不承出陣右のたこは能より  
松子におわくハ遊と可と経進はと承印在事ハ  
より道中への子飛節とお聞え中へ事

210.4  
1-1

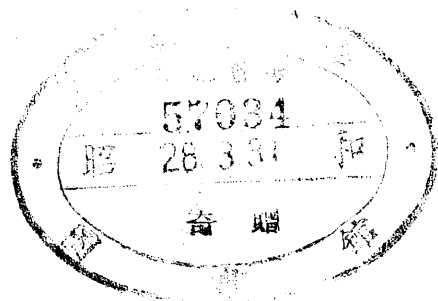
10.11.11

川角太閤記 一ノ下

雜史  
七四  
六六

210.4  
1-2





一 涉家城姫地へ去八日此四ツの路に帰城の途に  
此風呂へ入る所とて堀久吉郎への内時宜  
しは先内入くとて申とて母も入る所の  
より早くと對面中度と能成度くよ及ひる  
先風呂へ入中の者様も信勝と一ツ子孫を  
可有内入いとて先へ内入る所  
一 風呂内入は成るあるとて屋下は徳と能成は伽  
入中小姓流の信出の格子を年寄共とて  
物段くは觸り申すもの也明日可お立覚悟也

下ん一由一く一番の心立と食を焼せよ  
二番の心立は人丈以下と可お考るの二番  
のいさ川をくわいあを燈なりおのれ人数と  
立させ可有は流と針小小姓流うけ給ふ事  
中とお笑の中へ事

一 妙子幸行の義頭米幸行の長女よと云は流  
事ありと何なり一ハ別程候仕たると披露  
仕之處は所前の上名お先妙子幸行の流尋  
新米櫃子立てん一ゆ、金張何程あり也

流畏く新銀子七百五十貫目可  
此度の金子を子枚迄を其は度の八百枚  
少一お可有は度の金張一分一り跡、不子  
峰須賀老古妻の所に此を一番頭銃炮子銃至  
揚路と彦古傳の所によふと皆知り子あり  
一々取をよとの流意りく金張多  
此拂へ事

一 其次に蔵事行の長女お流と此米ハ何所と可  
有く哉若流事行の長女お流のよハ八万石

程可有在彦以日法扶持方取中そのり今日  
 より大晦日よりくにみさうたる此等用をせよ  
 其故名龍城の覺悟なく故兵糧米多て不  
 入也足輕弓矢炮此者の妻子ハ扶持方より此  
 事能も也せん一葉をも持るくと此む  
 應もたえやましくと能持意より其日  
 より是は歳をむくた彦渡と通大晦日迄乃  
 算用にお渡中事

一 今度西國の之金事り注名知の所前祇候

仕の今度西國の持せたる金銀何れも是の  
 阿中一はくんとは尋くを銀子の纏十貫目  
 程も持せしんや金子ハ四百六十枚は度ハ其  
 金銀も不入事めくありとあり是とい昨日  
 持をよ他所より之使者飛押るとに中一度  
 事の中やありあん其上獲たよとては能記為  
 ありの昨日路次へ持せよとの事

一 此風呂より彦渡の事ありはかむは台上事

一 久吉郎殿に此所意ハ龍城の用意一為子

仕る者覺悟し〜の故只今金事り花事り  
 ともと古奇堅中自は此度大博愛と打は目  
 了可無いと所意〜の事之を評及は所心  
 さりよゝい如所意世間此為所博愛も成目こ  
 来り風毛吹風と思〜中の帆と此上〜を成ひ  
 共あり〜の此身上の〜の如程の時〜その  
 う事此は分別涉む〜と事存ひ〜次は放〜  
 元為吉は阿ひ〜中よの言葉〜は涉言の  
 共を〜世間乃花子あまた〜は名花の

一ノ下

様候今花盛と思〜中の涉む思はむ〜と事  
 存は此為吉を〜人者〜と中奇道好〜と  
 とおひ〜中の幽吉〜は〜う〜似合中なる  
 あい〜門を〜感入の後の涉沙法と  
 おひ〜中〜事

一 黒田官兵衛指おは中上〜事〜は中上  
 ぬ〜事〜と中〜事〜と〜中〜事〜と  
 事〜様上〜ハ涉熱歎の格子ハお見〜え  
 中〜格〜も涉熱〜心〜は極量仕〜目出

度事おそれよは情愛よもは遊遊古は  
中よ通吉野の花も今整うや桜の花  
空をくわたりは後を成意と思はれりも  
時きくはくくいふくまは花や妻は雨風の  
陽氣と情おはらまに候おるそはるは  
心よりはくせぬと相見し中よけ上る光秀と  
分目の合戦被成は心よ目出度や花  
見初と覺中よとたりし遊中よ上る秀吉  
歩心のうはくは我心中とらと思はるん

少川こと歩後ひは知はとてはる事

一 常く歩祈禱するは依付は言能護摩堂  
の僧被中よは其様子を明白は歩陣殊  
外日柄あはくは性根おはく二度不帰無目と  
是中よ上る秀吉た免り一服と告りやう花  
とひらにをふまは君能為し討死の覺悟お  
まは此城に二度生く歸る事有まはまや  
あは光秀天命よはくは秀吉得大利を  
おゆはれまの國の城を居城をかまへる事



ふれは此下國に可下及中一きさるり明るる  
我為り及吉日そやと依出る始さる能僧も  
目初度出きてん其行出能とは阿心さ川一  
殊漸は産はと申聞え十は事

一 右筆能者とも不煩供仕能上は裁と依出  
る始さ四五人能所右筆皆くは所依はと中  
上作要り其お馬廻の者ともは物書侍とも  
十人行明解着到を付させる能も其りや  
とくや中解意くくたはり一帝廿丁程の能を

他り面く是をたは一人數擧乃所まく  
其おくとの依出は悪田友之助 等して  
手此より元十四五人中一渡は右へ通所意  
多くは以来迄の也右筆とは能存中くは  
明期まく此は雇能分りて所産はと能中  
渡り事

- 一 其邊より所袋括所は所對面とくは能入る
- 一 此風呂よりは觸る能は一番貝其杖の四つ  
の如くら二番うら九つの能るり二番ふら

野々々人数格のうふと歩意の二つ交れ見ハ  
 如也約束為至みくく立させ成れらる免乃  
 ろい名はたまーは来歩城乃大手口此らん  
 如ん橋迄をやく歩自身は出成れらるを  
 たくよとの歩意よく右橋の中程より  
 ろい歩立は登進より海道の時へ歩出成  
 床机子座橋を注掛其右より此ちやうらん  
 まんそう急れくくくの中は取乃はを  
 ハッ時分ありをやくくは後ひ武者おき進

とも一ツふ素とひくくは進ハ何者々と  
 歩意のくくくや着到初一は歩く付よ歩意  
 候とまうやいふや此着到くくく今歩初  
 くくと登進より面く此知音出つて其の面へ  
 若くくくくく以下と志のひくく子素一はと  
 お聞え申ひ是とせとる物と取取へを繼我  
 おまわしめ子仕立くくくもあり登進より  
 ろいくくふ肝と注婦一の事つけやうくく著る  
 右足付り事おろく歩れと着到の帳は